

ノヴォトニーとメルロ＝ポンティにおけるセザンヌの生と絵の関係

井ノ上 薫 (早稲田大学)

画家の生はその画家の絵とどのように関係するのか。本発表では、フリッツ・ノヴォトニーの主張と比較しながら、モーリス・メルロ＝ポンティがセザンヌの絵の解釈において用いる「非人間的な」という表現の意味するところを解釈することで、メルロ＝ポンティの考えでは画家の生と絵は不可分な関係にあることを示す。

メルロ＝ポンティは、『知覚の現象学』(1945)において、セザンヌは未だ人間がない前-世界の諸風景を描いているとする。この表現は、ノヴォトニーの「芸術との関係における人間セザンヌの問題」(1932)から引用されたものである。しかし、メルロ＝ポンティ研究の文脈では、ノヴォトニーの当該論文との関係は注目されてこなかった。この関係を明確に示すことは、詳細なセザンヌの絵の解釈と、メルロ＝ポンティの芸術論の理解に役立つだろう。

そこで本発表では、ノヴォトニーとメルロ＝ポンティが共にセザンヌの絵の解釈に用いる「非人間的な」という表現に注目し、各々の主張の違いを検討する。なぜなら、この点は各々が考える画家の生と絵の関係を示しており、両者の違いを示しているからである。検討に際して、前述の「芸術との関係における人間セザンヌの問題」と、メルロ＝ポンティがセザンヌについて主題的に論じた『意味と無意味』(1948)所収「セザンヌの懐疑」を中心的に扱う。

本発表の主張は次の通りである。ノヴォトニーは、一切の個別性や時間性を欠いて純粋に無時間的・先人稱的であることを非人間的と呼ぶ。非人間的な造形形式において、概念により規定された物ではなく観察により与えられた未規定的な環境が描かれ、同時に、その観察は画家の感情的または知的な関心を一切伴わない。そしてノヴォトニーは、セザンヌの絵を非人間的と特徴付け、個別的で歴史的なセザンヌの生との関係を些事とする。対してメルロ＝ポンティは、通常の見覚においては、規定された物の背景として見えていながら見えていない自然を、非人間的と形容する。さらに、物が現れ得るのは、私たちの誕生以来常に、非人間的な自然と各々の仕方で身体的に関わるから、つまりこの自然を生きるからだという。そしてセザンヌの絵は、病的気質という画家に固有な生き方を通じて、普段は見過ごされる非人間的な自然を明かすとされる。つまり、メルロ＝ポンティにとっての非人間的とは、個別の生やその歴史と不可分である。

この結論を導くために、第一節と第二節では、ノヴォトニーとメルロ＝ポンティ各々の「非人間的な」という表現の捉え方を解釈し、両者の違いを指摘する。第三節では、メルロ＝ポンティの考えでは、画家の生がその絵を決定することになるのではないかという問いに答える。終わりに、メルロ＝ポンティの主張が持ち得る意義を提示する。